

第四部会

近世初期キリシタンの長崎大殉教図と

日西関係

谷口智子

一五九七年の日本二十六聖人の長崎大殉教の報告はただちにイエズス会士やフランシスコ会士らの手によって世界に発信され、各地でさまざまに表象された。その出来事がどのように世界に伝わったか、当時のスペインと日本との交渉や通商ルートを通じてその経緯を明らかにするとともに、殉教のストーリーや文学や絵画を含めた芸術的表現が当時の人々にどのように受け止められたか、その意義を考察する。

特にクエルナバカ大司教座聖堂（フランシスコ会修道院）で近年（一九五九年）発見された二十六聖人殉教のフレスコ画については、その由来についての記録が見つかっておらず、不明な点も多い。しかし、当時の史料から壁画が描かれた背景を考察するとともに、その意義を考察した。

二十六人の殉教者内訳は、うち二十三人がフランシスコ会員で、残り三人がイエズス会員である。ほとんどが日本人信徒であるが、六人がスペインやメキシコからやってきたフランシスコ会士である。フランシスコ会員が当時の日本の権力者である太閤秀吉になぜ睨まれたのかについては、①イエズス会やポル

トガル商人たちとの軋轢、②スペイン国王の支配する広大な領域（一五八〇―一六四〇年のポルトガル併合の結果、ポルトガルの支配に及ぶ世界各地にも含む）に対し、日本側が宣教師を植民地主義の尖兵とみなしたから、③一五八七年以来禁教下の日本において、潜伏して目立たぬよう布教していたイエズス会に比べ、後進のフランシスコ会が布教活動を公に行ったから、などの理由がある。これらの理由により殉教したフランシスコ会員たちについての報告が、生き残った修道士たちの手により、マニラやマカオを通じて世界各地に報告され、一大ニュースとなった。もっとも優秀な報告者はフランシスコ会士リバデネイラとイエズス会士フロイスであった。殉教報告をもとに、彫刻や絵画や戯曲を含む様々な芸術作品が当時盛んに作られたが、中でも一九五九年にメキシコ、クエルナバカ大司教座聖堂で十八世紀の壁画の下から発見された二十六聖人殉教壁画は、教会堂内部の左右にわたって絵巻物のように展開された巨大な殉教壁画で特筆すべきものであり、その由来についても不明な点が多い。

本論では、美術史家の本間正義氏の解釈を基に、それが日本人作家によって描かれた可能性があることを明らかにしつつ、壁画の描かれた時期を、本間氏の推測より早い時期に可能性のあることを当時の史料から推測した。本間氏は、一六一五―一六年頃の支倉使節団滞在時期が壁画の制作時期であると解釈したが、発表者は一五九七年の殉教直後に殉教報告や殉教画が一般に流布していたという当時の史料の記述を見つけ、壁画がもっと早い十六世紀末に描かれた可能性もあることを示唆した。

第4部会

そして、クエルナバカのフランシスコ会修道院で壁画が描かれた理由について、クエルナバカはアジア貿易の起点たるアカプルコ港に至る陸の要衝地で、アジアでの布教や交易を望む修道士や商人が必ず通る道であるから、二十六聖殉教者の偉業を記念する目的で描かれたのではないかと考察した。そして一般信徒にとっては殉教者に対する崇敬を高めさせ、修道士にとっては日本布教への熱を高めさせるための一種の宣伝媒体になったのではないかと考えた。

キリシタンにおける近世と近代

内藤 幹 生

キリシタンの信仰態度やキリシタン自身のあり方は彼らを取り巻く社会・国家の時代状況により変化し、時代により異なった姿で現れた。本発表では変化が著しかった近世後期と近代初期における長崎浦上村のキリシタンの信仰に注目し、それぞれがどのように異なっているのか、時代とどのように関係しているのか、明らかにする。

当該期のキリシタンに関する研究は、主に外交問題や権力側の宗教政策からおこなわれてきた。また、キリシタンの動向についてはキリスト教的（カトリック的）な信仰心を貫いた者たちの動向に目が向けられてきた。当該期のキリシタンの信仰がどのような姿で現れ、取り巻く村社会やキリシタン集団内部に

どのように影響したかについては検討のよちがある。本発表ではそれらのことをふまえて、近世後期と近代初期における長崎浦上村のキリシタンの信仰について検討していく。

江戸幕府により徹底化されたキリシタン禁止政策はキリシタンに対するイメージを肥大化させた。キリシタンは危険視され、危険で奇怪なものとの表象と認識された。しかし、実在した潜伏キリシタンの姿は全く異なっていた。近世後期一八世紀末以降に何回かキリシタン露頭事件（浦上一番崩れ、浦上三番崩れ等）が発生したが、この時にキリシタンは幕藩制秩序の周縁的存在である「異宗」として処分された。それは危険で奇怪なイメージで定着していた実際のキリシタンは、イメージとはかけ離れた従順な農民であったためであった。そして、「異宗」とされたこの時のキリシタンの信仰は作物豊作、諸願成就、福德延命といった現世利益主義的信仰と来世救済主義がセットとなったものであった。それはまた、秘匿性を強め、他へ知れると信仰ができなくなり、そうなると現世利益の保証もなくなるというものであった。禁制下で隠匿し、信仰を継承し、発覚されても「異宗」とされた近世後期のキリシタンの信仰はこのようなものであった。

近代初期の幕末から明治維新にかけて浦上四番崩れというキリシタン迫害事件は起こった。これは、慶応三年（一八六七）にフランス人宣教師により教化されたキリシタンが旦那寺をよばずに、自分たちのやり方で葬儀を行ったことを発端とし、江戸幕府・明治政府による迫害事件に発展した事件である。この時のキリシタンは来世救済主義を突出させ、キリスト教（カト